

# 世間解 第四五七号

令和八(二〇二六)年 三月

発行 西法寺

## 念仏もうさるべし

— お彼岸に想う —



春・三月であります。皆さまには阿弥陀さまの「いつでも支えてるよ」とうい本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

三月は春のお彼岸の月であります。彼岸とは、色々な事にあい色々な思いを持つてゆかねばならない迷いのこの世(此岸)に対するおさとりの世界、つまり阿弥陀さまのお浄土のことでもあります。

春と秋の年二回、具体的には春分の日と秋分の日を中心とした一週間、先人は改めてこの岸から彼岸に思いを寄せる時とされてきました。善導大師さまのお聖教にはこんなお言葉があります。

その日正 東より出でて直西に没す。弥陀仏国は日没の処に当りて、直西 十萬億の刹を超過す。

朝、お日さまが真東から出て、夕方は真西に沈んでゆく。お彼岸のお日さまの動きであります。お日さまは毎日毎日変わることもなく日の出と日の入りを繰り返してまいります。平生に、お日さまの動きに心を向けることはあまりないかもしれませ

ん。「うわっ、もうこんな時間や!」と時間に追われている私たちにとって、時にはお日さまの運行に思いを寄せて、ゆっくりと沈んでいくお日さまに心を寄せることがあってもよいのだらうと思えます。

そのお日さまは必ず西に沈んでいきます。今、沈んでゆくと書きましたが、仏教徒は帰っていかれるという表現で日没を味わわれました。

お日さまが帰っていかれる、その西という方向にあらゆる“いのち”が安心し

て帰っていくことの出来る場所があった。それが阿弥陀さまのお浄土です。

私は日暮らしの中では、目的の場所を探すために地図を見たりということ以外で方向を意識することはほとんどありません。

そして、私はことさらに風が吹いてくる方向を意識することはありません。

“極楽のあまり風”

“寒くとも袂に入れよ西の風 弥陀の国から吹くとおもへば”

どちらも先人が阿弥陀さまのお浄土に心を寄せて紡ぎ出してくださったお言葉であります。

夏の太陽が、ほんの少し力を弱めた夕方、西から心地よい風が吹いてくる。

暑さにへとへとになっている私を阿弥陀さまやご往生くださった方々が「よしよし」と見ていたくださるんやなあ…という感じでしょうか。

そして、晩秋、「寒くなってきたなあ」と肩をすくめて歩く私に、ひゅーっ、と顔に風が当たる。「あつ、西からの風」「お浄土から吹いてくださってるんや」と気づかされて、そこから色々な思いがめぐってゆく。そんな心が恵まれる。

俱会一処へ諸の上善人とともに一処に会する。これは『仏説阿弥陀経』さまに示されるお言葉であります。

お日さまが帰り、風を通して味わうことが出来る西方には阿弥陀さまのお浄土あ

つてくださる。そのお浄土には懐かしい方々が待っていてくださるのであります。また会える世界。「俱会一処」ありがたいお言葉であります。

待ってくださる方々がいらっしゃるからこそ、安心して帰ることが出来るのでありましよう。

ゆっくりゆっくり西に帰っていただくお日さまは毎日毎日私に「お前さんの“いのち”の故郷はちゃんとこちらにあるんだよ」とお教えくださっているの

でしょう。風やお日さまを通して阿弥陀さまに願われている“いのち”の意味と方向を味わわれた先人のお心を承けて、「いろんな思いを持たねばならぬ日暮ら

しだけで、阿弥陀さまやご往生くださった方々が、広げればあらゆる出来事が私の心を育て支えてくださってんねなあ」と、あらためて自分自身の“いのち”の意味と方向を味わってみたいと思うのであります。